

2022年09月27日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【「介入」の効果は、一時的なもの、と考えます】

政府(財務省)および日銀の実施した「ドル売り円買い介入」は、インパクト大であった、と考えます。

ただし、「介入」の効果は、一時的なもので、大局での「ドル/円の上昇トレンド」に変化は無い、と考えます。

+++++

振り返ると、先週(2022年9月20日、21日)のFOMCでは、米ドルの政策金利を0.75%引き上げる、と発表された。

0.75%の利上げは、事前予想通りだった。

+++++

その翌日(2022年9月22日)の日銀政策決定会合では、大規模な金融緩和の継続を決めた。

黒田日銀総裁は、  
「当面、金利を引き上げることは無い」  
と述べた。

+++++

日米の金融政策が発表されて、日米金利差が拡大することが確実となり、それを材料に、ドル/円は上昇。

145.00を突破し、最高値を更新して、145.80-90水準を付けた。

+++++

この高値水準から、政府(財務省)および日銀は、「ドル売り円買い」の為替介入を実施。

介入は、断続的に行われた、と考えます。

介入により、ドル／円は、140 円台に大きく急落した。

時間が経過すると、この「ドル売り円買い介入」の規模は、3 兆円を超える、と推計されている。

確かに、大規模な介入と言える。

+++++

しかし、140 円台からは、ドル／円は、じり高に動いている。

為替介入に対する警戒感があるものの、今のところ、144 円台後半にまでリバウンド（反発上昇）している。

+++++

+++++

今回の介入に関しては、冒頭に述べた通りに、政府（財務省）および日銀の実施した「ドル売り円買い介入」は、確かに、インパクト大であった、と考えます。

ただし、現在のマーケット（外国為替市場）が材料にしているのは、日米金利差の拡大であり、それを根拠にして「ドル買い円売り」を市場参加者が行っているのだ、と考えます。

目先の需給を大規模な「ドル売り円買い介入」で歪めても、時間が経過すれば、日米金利差の拡大を材料にした「ドル買い円売り」は、湧くように、無尽蔵に出てくる、と考えます。

だから、「介入」の効果は、一時的なもので、大局での「ドル／円の上昇トレンド」に変化は無い、と考えます。

+++++

+++++

(2022 年 09 月 27 日東京時間 16 : 00 記述)